

ブラジルにおける日系移民の母語・ 子弟教育研究の現状と課題

根川 幸男

はじめに

ブラジルは、民族的・文化的多様性を特徴とする国である。こうした多様性の淵源は、先住民、ポルトガル植民、奴隷として輸入されたアフリカ系住民とともに、世界各国から導入された移民によるところが大きい。19世紀は、海外移民を含む人びとの移動がグローバル化された大移動の世紀であった。第二次世界大戦以前、最も多くの移民を受け入れたのは新大陸の国々だが、ブラジルはアメリカ合衆国、アルゼンチン、カナダに次いで大量の移民を受け入れている (Fausto 1999 : 275)。

筆者が勤務していた首都ブラジリアの大学でも、キャンパスには、ヨーロッパ系、アフリカ系、先住民系、アジア系、それらの混血した人びとがごく普通に溶け合っていた。

筆者の関心の第一は、こうしたブラジルのような移民国家・多文化社会にあって、日本人移民とその子孫はどのような人間形成・文化形成を行ってきたのかという問題を、子弟教育、特に学校教育において明らかにすることにあつた。また、第二に、こうした問題の延長上において、ブラジルをはじめ、フィリピン、ハワイ、アメリカなど帝国日本の非勢力圏の日本人移民と移民子弟の教育をめぐるさまざまな個別的事象や問題に焦点を当て、その実態と各地域の関係性、および帝国の勢力圏との連動性を明らかにするという課題を認識するに至った。すなわち、海外移植民の子弟教育のあり方を比較することによって、帝国日本の勢力圏のウチ（植民地）・ソト（移民地）を対象とする二つの研究領域を跨橋するという課題である。第一の関心からは、博士論文「戦前・戦中期ブラジルの日系移民子弟教育の史的研究」を上梓し、第二の関心からは、日文研共同研究「日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究」を実施した。

第二についてはいずれ成果論文集として編集・発行する予定があるので、本稿では第一の問題に即して、2013年度の日文研滞在期間を中心に筆者が実施した研究の紹介と研究史の中での位置づけを試みたい。

1. ブラジルの外国人移民と母語・子弟教育研究の概略

ブラジルのような多くの移民・エスニック集団を有する国家・地域では、一集団の性格や事象を捉えるために、他の集団と比較し、集団間相互の影響関係とともに、全体の中での位置づけを確認することが重要である。

1819-1947年の間にブラジルに導入された外国人移民は約490万人とされ、このうち10万人以上の移民を送出した国はイタリア、ポルトガル、スペイン、ドイツ、日本、ロシアである。中でも、イタリアからは1947年までに151万3,151人がブラジルに移住している（表1参照）。

表1 ブラジルにおける国別入移民数（1819-1947）

国	入移民数（人）
イタリア	1,513,151
ポルトガル	1,462,117
スペイン	598,802
ドイツ	253,846
日本	188,622
ロシア	123,724
オーストリア	94,453
シリア・レバノン	79,509
ポーランド	50,010
ルーマニア	39,350
イギリス	32,156
リトアニア	28,961
ユーゴスラビア	23,053
スイス	18,031
フランス	12,103
ハンガリー	7,461
ベルギー	7,335
スウェーデン	6,315
チェコ	5,640
その他	347,354
合計	4,903,991

出典：Carneiro 1950, p. 222.

同時期、ポルトガルからは146万2,117人、スペインからは59万8,802人、ドイツからは25万3,846人、後に詳しく述べるが、日本からも18万8,622人の移民が導入された（Carneiro 1950：222）。

ブラジルへの移民の歴史が長く人口的に大きな集団を形成したドイツ系・イタリア系移民子弟の教育については、多くの研究蓄積がある。筆者が参照したもので、概括的で特に重要と思われる論考をここに挙げておく。

旧宗主国ポルトガルやアフリカ系奴隷以外で、最も早くブラジルに導入されたのはドイツからの移民である。1824年7月、37人がリオ・グランデ・ド・スル州のサンレオポルドに入植し、1829年5月には、パラナ州のリオ・ネグロにドイツ人移民17家族が入植している（Biembengut e Gaertner 2010: 175）。その後、ドイツ人移民は、リオ・グランデ・ド・スル、サンタ・カタリーナ、パラナというブラジル南部三州を中心に、続々入植していく。Kreutz (2000a) “Escolas Comunitárias de Imigrantes no Brasil: Instância de Coordenação e Estruturas de Apoio”¹と Kreutz (2000b) “A Educação de Imigrantes no Brasil”²の二論文は、主にブラジル南部のドイツ系移民の教育を研究してきた Kreutz が、イタリア系、ポーランド系、日系という他の移民子弟の教育に対象を広げて概説し、それぞれを比較したものである。ドイツ系をはじめとする教育、教育機関がいずれもキリスト教会と不可分な関係にあったのに対して、日系の場合、信仰とは切り離されて教育がなされていた点（ただ、聖州義塾のようにプロテスタント主義を教育の根幹に据えた教育機関の存在は見逃せない）、20年代から30年代にかけて、他のエスニック教育機関がブラジル公教育機関へ転換していく中で、日系教育機関が突出して増加し、出自集団の言語や性格を強く残している点を指摘する。

宇佐見幸彦（2007）「ブラジルにおけるドイツ系移民について」³は、ドイツ語文献に依拠しながら、19世紀から戦前期にかけての教会や学校を核とするブラジル・ドイツ系移民コミュニティの全体像を描いている。こうした諸論考では、ブラジルにおいてドイツ系移民が Teuto Brasileiro（ドイツ系ブラジル人）とし

1 *Revista Brasileira de Educação*, No. 15, pp. 159–76.

2 *500 Anos de Educação no Brasil*. Belo Horizonte, Auêntica, pp. 347–73.

3 『関西大学人権問題研究室紀要』54号、1–36頁。

て、言語・文化を再創しながら、第二次大戦頃まで多くのエスニック母語学校を保持してきたことが指摘されている。こうした母語保持には、日系もふくめて唱歌教育が大きな影響を持ったことが考えられる。Garbosa (2004) “Es tonen die Lieder…”⁴ は、ブラジルのドイツ系教育機関における音楽教育と歌謡集について整理しており、ドイツ系移民子弟教育における音楽教育の重要性もさることながら、日系移民子弟教育の唱歌教育との比較の素材を提供している。

これに対し、イタリア系はブラジルにおける最大のエスニック集団である。Morreto Ribeiro (1990) “Escolas Italianas em Zona Rural do Rio Grande do Sul”⁵ は、19世紀を通じて、ブラジル各地の特に農村部に、私立イタリア人学校、イタリア政府補助学校、イタリア系少教区学校の三種の初等教育機関が開かれた点を指摘する。そして、南部三州のイタリア系教育機関の多くは、公立学校のない孤立した地域にエスニック・コミュニティ母語学校として開かれたが、教師への財政的支援、学校資材、特に本の寄贈、イタリア政府代表者訪問によるイタリア人学校開設と運営に関する精神的奨励など、本国政府による支援が行われていたことを明らかにしている。さらに、農村部にはイタリア人入植者たちによって、「カッペラ」(capela) と呼ばれる礼拝堂が建てられたが、このカッペラ運営のために委員会が組織され、小教区学校が設立された。ただ、こうしたエスニック・コミュニティ学校としてのイタリア人学校は、早い時期に公的教育機関に転換していった (Kreutz 2000b : 359)。つまり、それらは入植地に公教育機関がなかったからつくられたのであり、公教育機関ができると競合せずに、イタリア人学校を閉鎖する傾向にあったのである (中岡・川西 2009 : 146)。これは初期にこそイタリア語やその方言で教育されたが、イタリア語はポルトガル語と同じラテン語系言語であり、言語的適応が早かったためと考えられる。また、ドイツ系移民と異なり、イタリア系移民の場合、コミュニティ統合の中心は、あくまでも教会や先述したカッペラであり、学校には大きな比重がおかれなかったとされる (Kreutz 2000b : 360)。

4 *Revista da abem*, v. 10, Porto Alegre, pp. 89–98.

5 De Boni, Luis A. (org.) *A Presença Italiana no Brasil*. Porto Alegre; Torino: Escola Superior de Tecnologia; Fondazione Giovanni Agnelli, v. II.

20世紀に入ってブラジル商工業の中心となるサンパウロ州とサンパウロ市の状況については、Demartini, Zelia de Brito Fabri e Espósito, Yara Lúcia (1989) “São Paulo no Início do Século e Suas Escolas Diferenciadas”⁶が、アフリカ系もふくめた移民集団の教育機関の出現と発展、30年代ヴァルガス政権下での衰退と性格の変容を対象に、それぞれを比較しながら記述している。ただ、日系教育機関を対象とする場合、ポルトガル語資料のみに依拠し、日本語資料を排除するのは資料的な面から致命的であり、日系研究者と連携することが解決の一方法となろう。Marcílio, Maria Luiza (2005) *História da Escola em São Paulo e no Brasil*⁷は、植民地時代の16世紀から20世紀末までのサンパウロを中心とするブラジルの幼児・初等・中等教育機関と、それらをめぐる歴史、法制、教育実践、教師養成、外国人移民の影響などについて通史的に整理した論考である。日系教育機関出現前の外国系教育の状況と20-30年代の変化について、ブラジル全体の中でのサンパウロ市、その中での日系移民子弟教育の普遍的な点と特異さを明らかにする上で、これらは重要な素材を提供している。Shibata (1998) *As Escolas Japonesas Paulistas (1915-1945): Afirmação de Uma Identidade Étnica*⁸は、戦前期ブラジルの日系移民子弟教育を概説するとともに、サンパウロ州内陸部マリリア周辺の日系移民子弟教育を取り上げ、その地域的特性と日系アイデンティティ形成について述べ、都市サンパウロとの格差や異なった状況を明らかにしている点で注目される。

ただ、以上の先行研究は、Shibata (1998) や Marcílio (2005) を除いて、一エスニック集団や一州内の母語教育・移民子弟教育の特徴を捉えることを目的としており、今後さらに細かい単位の地域や学校別の特性を十分明らかにしていく必要があるだろう。

6 *Ciência e Cultura*. São Paulo: Sociedade Brasileira para Progresso da Ciência, pp. 981-95.

7 São Paulo: Instituto Fernand Braudel de Economia Mundial.

8 São Paulo: Dissertação de Mestrado/USP.

2. ブラジルの日系移民と母語・子弟教育研究の概略

ブラジルでは、第二次大戦直前には約 500 校から 600 校もの日系教育機関が存在したが⁹、それらを対象とした研究は、同じ新大陸の移民研究の中でハワイや北米を対象とするものと比較して、蓄積も少なく空白領域が多い。また、数少ない先行研究でも、例えば、「戦争までのブラジルでの日本語教育の理念は、日本のそれと同じく皇民を育成することにあります」（野元 1974：17）と述べるなど、一面的かつ一義的な理解がなされてきた¹⁰。ブラジル日系移民史における最も新しい周年史である『ブラジル日本移民百年史』の第 3 巻に収められた森脇・古杉・森（2010）「ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」¹¹は、戦前から現代までのブラジル日系子弟教育、特に日本語教育の面を取り上げた通史的論考である。日本人移民の活動の舞台である生活世界に即して、戦前期を第 1 期（コロノ時代、1908–1923 年）と第 2 期（植民地時代、1924–41 年）に分け、時代的变化に留意している。また、サンパウロ市の大正小学校と農村植民地のコチア小学校の事例を並置するなど、地域差にも目配りしている点が見られる。しかし、大正小学校とともにサンパウロ市の代表的日系教育機関であった聖州義塾や暁星学園については言及がなく、農村日系小学校としてはコチア小学校の他に、トレス・バラス、レジストロ、イタペシリカ・ダ・セーラの例がわずかに引用されているにすぎない。全体的に、日系植民地に卓越した子弟教育のモデルや理念の変遷の整理に重点がおかれ、各教育機関での教育内容や環境、教師の供給システム、子どもたちの学校をめぐる日常生活に深く立ち入った記述は見られない。

以上の諸研究で明らかにされた戦前期日系社会における子弟教育論や教育理念の変遷が、実際の教育にいかに関与されたのか、また地域や学校間の格差やそれぞれの関係は子どもや教師たちにどのような影響をもたらしたのか、すなわち、時代性と地域的格差をふまえた分析視角の導入が必要とされるのである。

こうした問題をふまえて、筆者の今回の訪日研究の基礎をなしたもののいく

9 『伯刺西爾時報』1720 号（1938 年 10 月 21 日）に、「邦人学校四七六校中公認のものは二八三、未公認一九三校」とあり、寺門他編（1941）「刊行の辞」に「同胞の血と汗によつて建設せられた、全伯六百に余る日本語学校の存在（…）」と記されている。

10 野元菊雄（1974）「ブラジルの日本語教育」『日本語教育』24 号、15–20 頁。

11 『ブラジル日本移民百年史第 3 巻・生活と文化編（1）』風響社、251–370 頁。

つかに触れておきたい。根川幸男（2007）「サンパウロ市リベルダーデ地区における戦前・戦中期の日系教育機関」¹²は、サンパウロ市中心部の日系エスニックタウン「東洋街」の形成において、戦前すでに日系教育機関が集中していたリベルダーデ地区が、そのエリア形成の契機となった点を明らかにしたものである。各日系教育機関については二次資料から得られた最低限の概説にとどまっているが、戦前期の日系子弟教育における都市サンパウロの比重の高さについて知る機会となった。

Negawa, Sachio (2008) “Políticos e Militares Nikkeis Brasileiros”（ブラジルの日系政治家と軍人）¹³、また、根川幸男（2008）「大和魂とブラジリダーデー境界人としてのブラジル日系政治家と軍人」¹⁴は、戦前・戦中期の日系子弟教育機関に学んだ二世たちが、戦後どのような自己形成をなしたかについて、「境界人」という概念を援用しながら、ブラジルの日系政治家と軍人を例に論じたものである。いく人かの日系政治家と軍人の言説、インタビュー資料を検討し、自らの境界性を二言語・二文化人として積極的に活用しながら、ブラジル日系二世としての理想的パーソナリティを形成していく過程とメカニズムを明らかにした。根川幸男（2009）「戦前期ブラジルにおける日系教育機関—聖州義塾と小林美登利」¹⁵は、ブラジル最初の日系寄宿舎学校である聖州義塾の成立過程についてやや詳しく述べているが、国立国会図書館所蔵「小林美登利・聖州義塾関係資料」中の主な資料を紹介することに比重がおかれている。

Negawa, Sachio (2009) “Tipologia e Característica das Instituições Educacionais Nikkeis no Brasil do Período Pré-Guerra”（戦前期ブラジルにおける日系教育機関の種類と性格）¹⁶は、戦前期ブラジルの日系教育機関を種類別に分類し、それぞれの性格について概観したものである。根川幸男（2012a）「戦前期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点—サンパウロ市日系子弟の二言語・二

12 『龍谷大学経済学論集』第46巻5号、龍谷大学経済学会、147–163頁。

13 *Cinqüentenário da Presença Nipo-Brasileiro no DF*. Brasília: FEANBRA, pp. 307–328.

14 森本豊富編著『移動する境界人—「移民」という生き方』現代史料出版、55–87頁。

15 『人文研 JINMONKEN』No. 7、サンパウロ人文科学研究所、104–116頁。

16 *Anais do XX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e VII Congresso Internacional Estudos Japoneses*. São Paulo: FFLCH/USP, pp. 303–310.

文化教育に注目して一」¹⁷は、ブラジル日系移民子弟教育の先進性と問題点についての、30年代を中心としたサンパウロ市日系コミュニティの言語使用状況と、日系教育機関における教育環境の面からの考察である。特に、ブラジル派遣教員留学生の役割、大正小学校や聖州義塾など日系教育機関での教育内容、子どもたちの二言語・二文化生活という三つのトピックを分析し、戦後にトランスナショナルな二言語・二文化人としての「日系ブラジル人」アイデンティティやパーソナリティを創出していくプロセスとメカニズムについて考察した。また、戦前期ブラジルの日系教育機関における二言語・二文化教育が、戦後の「日系ブラジル人」パーソナリティの理想型を創り出す要因となり得た点、こうした言語能力や文化リテラシーが、ホスト社会における言語的・文化的資産として活用される点について、大正小学校や聖州義塾といった日系教育機関やその生徒たちの生活など、いくつかの事例を紹介しながら明らかにしている。

根川幸男（2012b）「近代における一日本人キリスト者の越境ネットワーク形成—小林美登利の移動と遍歴を事例として—」¹⁸は、根川前掲論文（2009）で取り上げたキリスト者小林美登利の会津、京都、ハワイ、アメリカ本土、ブラジルにわたる移動・遍歴の足跡を追い、さまざまなく縁を契機に人的ネットワークを形成していく過程とメカニズムを明らかにした。従来国や地域別に研究される傾向が強かった近代日本人移民史を、複数地域を横断する越境史¹⁹というグローバルな視点で捉え直す試みであり、ハワイやアメリカ本土で小林が体験した排日運動をブラジルでの教育活動に反映させていく過程を描き出した。根川幸男（2013a）「戦前期ブラジルにおける日系キリスト教教育機関の動向—1930年代前半の聖州義塾を事例として—」²⁰は、根川前掲論文（2012b）で取り

17 森本豊富・根川幸男編著『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向けて—』明石書店、54–75頁。

18 『日本研究』第46集、国際日本文化研究センター、125–150頁。

19 「越境史」は、もとは1990年代の米国において一国史と比較史に対する批判から起こった新しい歴史研究のパラダイムである。すなわち、「越境移民」(transnational migration, transmigration) というニナ・グリック・シラーの提示した概念に基づき、「地理的越境」にとどまらず、「政治的越境」「文化的越境」という枠組みを用いて一国史的視点に揺さぶりをかける。(Schiller, Nina Glick et al. (1992) *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered*. New York: The New York Academy of Sciences.)

20 『経済学論叢』第64巻4号、同志社大学経済学会、173–198頁。

上げた小林美登利と聖州義塾の30年代の活動を紹介したもので、ブラジル日系子弟教育における小林とキリスト教のプレゼンスの大きさ、永住主義と伯主日従教育を貫きつつ発展した同塾の教育実践について明らかにしている。

3. 越境史的な視点によるブラジル日系移民子弟教育研究

今回の訪日研究で特に取り組んだ課題は、①戦前・戦中期の日系子弟教育にたずさわった教育者の評伝的研究、②日系子弟たちの学校を中心とする生活世界の再現、③1930年代後半から40年代初頭（太平洋戦争開戦直前）にかけての日系子弟教育とスポーツ、銃後運動との関係解明、④ブラジルを中心とする南米諸国日系社会の太平洋戦争前後の動向の把握であった。いずれも先行研究では、未開拓な分野である。①については、すでに上記の根川（2012b）を公表していたが、同時代に活躍した日系教育者岸本昂一と彼の設立した暁星学園について、根川幸男（2013c）「ある戦闘的キリスト者の大陸雄飛とブラジルでの教育活動—岸本昂一と暁星学園をめぐる—」²¹、④と関連して、根川幸男（2013b）「第二次世界大戦前後の南米各国日系人の動向—ブラジルの事例を中心に—」²²を公表した。②と③については、現在原稿を準備している。

これらの研究には、同時代史料を丹念に渉獵する必要があったが、ブラジル側では戦中に多くの記録が失われたため、困難な点も多かった。ただ、戦前・戦中期に日系子弟の教育に関わった人びとや当時の学習者たち等、多くの聞き取りから貴重な証言と示唆が得られた。また、筆者が共同研究員として参加している、人間文化研究機構日本関連在外資料の調査研究「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」²³（研究代表者：劉建輝）アメリカ大陸チームB：南米ポルトガル語圏における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究（研究代表者：細川周平）では、2010年度以来、南米の邦字新聞のデジタル化を進めており、これによって戦前期ブラジルの邦字新聞『伯刺西爾時報』『日伯新聞』『聖州新報』などが簡便に閲覧できるようになった。これらの邦字新聞は、

21 『キリスト教社会問題研究』第62号、同志社大学人文科学研究所、199-225頁。

22 『立命館大学言語文化研究』第25巻1号、立命館大学、137-154頁。

23 人間文化研究機構「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」
<http://www.nihu.jp/sougou/zaigai/imin.html>。

史資料の乏しい戦前期ブラジル日系社会の貴重な同時代史料であり、今回の研究を進める上で大きな支援となったことを付け加えておきたい。

4. 今後の研究課題と可能性

筆者の研究はなお途上にあり、多くの課題を残している。今後の研究課題と可能性を以下にまとめておきたい。

①他の移民集団の母語教育・子弟教育との比較研究

ドイツ系、イタリア系をふくむエスニック集団の子弟教育については、ポルトガル語資料だけでなく、ドイツ語、イタリア語資料の収集と分析が不可欠であるが、これは筆者の能力を超えるものである。筆者は既存のポルトガル語の二次資料を利用したが、ブラジル人やドイツ人、イタリア人研究者との共同研究が可能になれば、史資料の発掘とともに実りある比較研究が可能となるであろう。加えて、同時代のブラジル国内のエスニック集団間の比較だけでなく、ハワイや北米、台湾、満洲、南洋など帝国日本の勢力圏における日系子弟の教育体験との比較という、ミクロとマクロ両方のレベルでの比較研究の可能性が、今後の方向性として考えられる。

②日系子弟の多極的なモビリティの研究

日系子弟の教育を目的とした移動を考える場合、サンパウロ市と農村部という二極的な構造だけでなく、地方中核都市も加えた多極的な構造の中での子弟教育のあり様を明らかにしていく必要がある。例えば、リンス学園という中等教育準備科をふくむ総合学園を有していたサンパウロ市内陸都市リンスや、日本人会が中等学校の経営に関わっていたプレジデnte・プルデnteといった地方中核都市と日系植民地間の相互関係、それら地方の極同士の関係を明らかにする必要がある。その上でなお、卓越した地位を保っていたサンパウロ市とそれぞれの地方極との多極の関係の上に成り立った日系移民子弟教育のシステム、その中で社会上昇の機会を求めていた日系子弟たち自身の生をどう捉えるかという問題も加わる。30年代後半になって現れる日本留学という選択肢も視野に入れ、教育を目的とした日系子弟の都市と地方間、ブラジルと日本間の移動のダイナミズムが明らかされることが期待される。

③戦後日系二世の母語・エスニック教育資源の活用の研究

戦後日系二世が進出した分野は多岐にわたっており、この多様性こそが戦前と戦後の日系社会を分ける大きな特徴である。筆者が政治家・軍人の事例から抽出し得たモデルが他の分野の日系人にも当てはまるかどうか、検証していく必要がある。特に、日系人が重視してきたといわれる母語教育・子弟教育の分野で、戦前の教育の遺産・資源が、戦後どのように評価され活用されたのかという問題は重要である。

今後、日文研や先述の人間文化研究機構プロジェクトとの連携を保ちながら、以上三つの研究課題を追究していきたいと考えている。特に、今回の訪日研究の成果を継承しつつ近年の移民研究の成果を活用し、ブラジルのような帝国日本の勢力圏外における母語教育・子弟教育研究を深めていきたい。それとともに、満洲、フィリピン、南洋など帝国日本の勢力圏内の教育の事例と比較し、戦前・戦中・戦後期を射程に入れた海外日系子弟の複数言語・文化体験と教育の比較研究のための基盤形成を試みたい。

【謝辞】

末尾ながら、今回の滞在中、井上章一先生、細川周平先生をはじめ日文研の多くの先生方、スタッフの皆さんにお世話になった。筆者の研究者人生の中で最も充実した幸福な一時期を用意してくださった方々に深くお礼を申し述べたい。

参考文献

- 宇佐見幸彦（2007）「ブラジルにおけるドイツ系移民について」『関西大学人権問題研究室紀要』54号、1-36頁。
- 寺門芳雄他編（1941）『パ延長線教育史』パ延長線教育史刊行委員会。
- 中岡義介・川西光子（2009）「ブラジル国リオ・グランデ・ド・スル州のイタリア移民都市における学校の発生と展開、構造に関する調査」『兵庫教育大学研究紀要』第35巻、139-152頁。

- 根川幸男（2007）「サンパウロ市リベルダーデ地区における戦前・戦中期の日系教育機関」『龍谷大学経済学論集—中村尚司教授退官記念号』第46巻5号、龍谷大学経済学会、147-163頁。
- 根川幸男（2008）「大和魂とブラジリダーデー境界人としてのブラジル日系政治家と軍人—」森本豊富編著『移動する境界人—「移民」という生き方』現代史料出版、55-87頁。
- 根川幸男（2009）「戦前期ブラジルにおける日系教育機関—聖州義塾と小林美登利」『人文研 JINMONKEN』No. 7、サンパウロ人文科学研究所、104-116頁。
- 根川幸男（2012a）「戦前期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点—サンパウロ市日系子弟の二言語・二文化教育に注目して—」森本豊富・根川幸男編著『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向けて—』明石書店、54-75頁。
- 根川幸男（2012b）「近代における—日本人キリスト者の越境ネットワーク形成—小林美登利の移動と遍歴を事例として—」『日本研究』第46集、国際日本文化研究センター、125-150頁。
- 根川幸男（2013a）「戦前期ブラジルにおける日系キリスト教教育機関の動向—1930年代前半の聖州義塾を事例として—」『経済学論叢』第64巻4号、同志社大学経済学会、173-198頁。
- 根川幸男（2013b）「第二次世界大戦前後の南米各国日系人の動向—ブラジルの事例を中心に—」『立命館大学言語文化研究』第25巻1号、立命館大学、137-154頁。
- 根川幸男（2013c）「ある戦闘的キリスト者の大陸雄飛とブラジルでの教育活動—岸本昂一と暁星学園をめぐる—」『キリスト教社会問題研究』第62号、同志社大学人文科学研究所、199-225頁。
- 野元菊雄（1974）「ブラジルの日本語教育」『日本語教育』24号、15-20頁。
- パウリスタ新聞社編（1996）『日本ブラジル交流人名事典』、五月書房。
- 森脇礼之・古杉征己・森幸一（2010）「ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」『ブラジル日本移民百年史第3巻・生活と文化編（1）』風響社、251-370頁。

- Biembengut, Maria Salett e Gaertner, Rosin ete (2010) “Livro Did tico de Matem tica de Escola Teuto-Brasileira: Considera es sobre A Obra de Ferdinand Hackbart, Konrad Glau e Hermann Lande de 1906.” *Revista Brasileira de Hist ria da Matem tica* 10:20 (outubro/2010–mar o/2011), pp. 173–92.
- Carneiro, J. Fernando (1950) *Imigra o e Coloniza o no Brasi*. Rio de Janeiro: Faculdade Nacional de Filosofia, Cadeira de Geografia do Brasil. Publica o Avulsa 2.
- Demartini, Zelia de Brito Fabri e Esp sito, Yara L cia (1989) “S o Paulo no In cio do S culo e Suas Escolas Diferenciadas.” *Ci ncia e Cultura*. S o Paulo: Sociedade Brasileira para Progresso da Ci ncia, pp. 981–95.
- Fausto, Boris (1991) *Historiografia da Imigra o para S o Paulo*. S o Paulo: Editora Sumar .
- Fausto, Boris (1999) *Hist ria do Brasil* (6th Ed). S o Paulo: Edusp.
- Garbosa, Luciane Wike Freitas (2004) “Es tonen die Lieder...” In *Revista da abem*, Porto Alegre, v. 10, pp. 89–98.
- IBGE (2000) *Brasil: 500 Anos de Povoamento*. Rio de Janeiro (Ap ndice: Estat sticas de 500 Anos de Povoamento).
- IBGE (2008) “Territ rio Brasileiro e Povoamento: Alem es.” In *Brasil: 500 Anos de Povoamento* (<http://brasil500anos.ibge.gov.br/territorio-brasileiro-e-povoamento/alemaes/as-tradicoes-e-o-abrasileiramento>) [access: 24 May 2013].
- Kreutz, L cio (2000a) “Escolas Comunit rias de Imigrantes no Brasil: Inst ncia de Coordena o e Estruturas de Apoio.” *Revista Brasileira de Educa o*, no. 15, pp. 159–76.
- Kreutz, L cio (2000b) “A Educa o de Imigrantes no Brasil.” In *500 Anos de Educa o no Brasil*. Belo Horizonte: Aut ntica, pp. 347–73.
- Marc lio, Maria Luiza (2005) *Hist ria da Escola em S o Paulo e no Brasil*. S o Paulo: Instituto Fernand Braudel de Economia Mundial.
- Matos, Alderi Souza de (2008) *Erazmo Braga, O Protestantismo e A Sociedade Brasileira*, ed. Cultura Crist .

- Ministério da Educação e Saúde/ IBGE (1943) *O Ensino no Brasil em 1938, Serviço de Estatística da Educação e Saúde*. Rio de Janeiro, p. XVIII.
- Morreto Ribeiro, Liane Beatriz (1990) “Escolas Italianas em Zona Rural do Rio Grande do Sul.” In De Boni, Luis A. (org.) *A Presença Italiana no Brasil*. Porto Alegre/Torino: Escola Superior de Tecnologia; Fondazione Giovanni Agnelli, v. II.
- Negawa, Sachio (2008) “Políticos e Militares Nikkeis Brasileiros.” In *Cinqüentenário da Presença Nipo-Brasileiro no DF*. Brasília: FEANBRA, pp. 307–328.
- Negawa, Sachio (2009) “Tipologia e Característica das Instituições Educacionais Nikkeis no Brasil do Período Pré-Guerra.” In *Anais do XX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e VII Congresso Internacional Estudos Japoneses*. São Paulo: FFLCH/USP, pp. 303–310.
- Rossi, Ednéia Regina (2005) “Identidades Étnicas e as Escolas Primárias na Primeira República.” *Revista HISTEDBR*, n. 17, Campinas, pp. 58–65.
- Sakurai, Célia (1994) “A Fase Romântica da Política: Os Primeiros Deputados Nikkeis no Brasil.” In Fausto, Boris e outros (org.) *Imigração e Política em São Paulo*. São Paulo: Editora da UFSCar, pp. 127–77.
- Shibata, Hiromi (1998) *As Escolas Japonesas Paulistas (1915–1945): Afirmação de Uma Identidade Étnica*. São Paulo: Dissertação de Mestrado/USP.
- Schiller, Nina Glick et al. (1992) *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered*. New York: The New York Academy of Sciences.